レッスン：6“M”

テーマ：エピグノーシス/魂のセルフ・エピグノーシス

MAC6.6M/DOC

私の兄弟・姉妹達、

スピリット・火・光の子供達よ。私達は常に主、絶対、神の聖性に抱かれています。

絶対存在は無数の聖なるモナド(Holy Monad)から成っており、各聖なるモナドは無数のSelf Monad Spirit Beingから成っています。Spirit Being としてのMonad Self（スピリット存在としてのモナドセルフ） として、それは絶対セルフ・エピグノーシス内における、「Lifeであるセルフ・エピグノーシス」(Life Self Epignosis)であり、それはそれ自身を何か別のものとして認識することはできず、絶対至福の中にあります。

ひとたびSpirit Beingがそれ自身のブレーシス（＊神の意志）あるいは意志によって、人間のイデアを通じて下降することを決意すると、それはロゴスの現れを通じて創造の諸世界にそれ自身の微細な部分をスパークさせます。この微細な放射は人間のイデアを通過し、存在の諸世界において魂のセルフ・エピグノーシスとして現れます。魂のセルフ・エピグノーシスはスピリットとして最内奥のセルフの特質を完全に表現していますが、唯一の違いはそれが人間のイデアを通じた生の現れであることです。その特質には神の本質が全て具現されています。その特質は神の本質からのみ引き出されたものですから、神の本質にない特質を表現するのは不可能です。

しかし、無知の中に取り込まれる結果、神の本質を表現する上で制限が生じることはありえます。自己実現に到達するためにパーソナリティーがサイコノエティカルな意味で、それらの制限から脱して上昇するに従って、それらの（神の）特質も次第に現れるようになります。

Spirit Being Monad Self（スピリット存在であるモナドセルフ）は絶対存在のアウタルキー（＊自己充足）と多重性の中で、絶対英知・絶対善・絶対パワーの特質を有しています。人間のイデアを通じて降下した魂のセルフ・エピグノーシスは、主の本質の特徴を保持しています。なぜなら、魂のセルフ・エピグノーシスとして、それは創造物ではなくむしろSpirit Being Monad Self（スピリット存在であるモナドセルフ）からの表現だからです。

全ての魂のセルフ・エピグノーシスは、神の本質である特徴を正確に同じように備えています。

そして全ての魂のセルフ・エピグノーシスの間に違いは全くありません。

そしてそれらの現れはLifeそれ自体の表現として、創造の諸世界の中で、存在の諸世界の中で輝いています。

セルフ・エピグノーシスが表現されるというポイントにおいて、神の特質の現れの順序が絶対英知・絶対善・絶対パワーから絶対善・絶対英知・絶対パワーに変化するのみならず、イデアの投射として永遠のアトムの原理も備わっています。

実際、イデアの目的としての永遠のアトムは、創造の諸世界における魂のセルフ・エピグノーシスの投射のその瞬間から始まり、それは人間を益するための魂のセルフ・エピグノーシスの供託なのです。

　魂のセルフ・エピグノーシスはアークエンジェルでもあるのですが、特定のグループまたはオーダーに属しているわけではありません。なぜなら、下降は全体から“I”（私）を区別するという創造内の特別な目的のためだからです。

\*Page2

絶対英知および他の全ての絶対リアリティーは絶対存在のアウタルキーの中にあります。絶対英知と絶対善は全ての人の中にあり、啓発に導く簡単な知識でさえ私達の中にあります。しかし、人間がそれを具現するためには、不特定数の現在のパーソナリティーと共にLifeの現象の中で体験を重ねなければなりません。

体験は、無知に取り込まれた永遠のアトムが自己実現のカラリング(colouring、染め付け）によって最終的に魂のセルフ・エピグノーシスと同じ特質を表現できるようになる上で助けになります。

魂のセルフ・エピグノーシスに提供されるこのカラリングは、全体の中で“I'ness”（私であること）を知る能力です。自己実現の可能性を与える能力は、セルフ・エピグノーシスです。この能力は人間のイデアを通じて下降する“光”にのみ与えられます。セルフ・エピグノーシスは魂のセルフ・エピグノーシスの創造ではなく、魂のセルフ・エピグノーシスの現れなのです。

エピグノーシスという言葉はギリシャ語に由来し、特定の“何か”に関する知識を有する、意識を有する、という意味です。この知識とはあなたが内側で“正しい、あるいは間違っている”と知っている何かです。

セルフ・エピグノーシスの能力は、魂のセルフ・エピグノーシスを創造するためにSpirit Beingが人間のイデアを通じてそれ自身から輝きをスパークした時点で生じたのではありません。この能力はすでにSpirit Beingのアウタルキーの中にあるのですが現れておらず、動き・振動・波動が全くない状態にあります。

魂のセルフ・エピグノーシスは量という点を除けば、絶対存在の絶対エピグノーシスと同じです。人間のイデアにロゴス的表現として、可能性として与えられた能力としてのセルフ・エピグノーシスの質のゆえに、パーソナリティーは全体の中で、多重性の中で誰かの“I'ness”（私）とは異なった何かとして“I am I”（私は私である）と言うポイントに到達できるのです。

そして、最終的に全てが全ての中にあり、表現された状態あるいは表現されていない状態にあろうとも、多重性の中にあるLifeのマジックが永遠の動き、波動、振動の中にあるというアウタルキーの状態に戻ることができるのです。

魂のセルフ・エピグノーシスはその領域として存在の４つの世界、あるいは４つのヘブンを有し、それらは調和、Lifeそれ自体の世界であり、必要性（＊ニーズ）および二元性のない世界です。それらはスーパーサブスタンスとしてのマインドの世界、ノエティック界、元型・イデア・法則・原因の世界です。

Spirit Being（スピリットとしての存在）が人間のイデアを通じてそれ自身の微細な部分をスパークさせ、魂のセルフ・エピグノーシスとして表現された瞬間から、セルフ・エピグノーシスはLifeの現象の諸世界の中へどんどん下降し、様々なレベルで表現されます。

この動きの結果、私達はセルフ・エピグノーシスを本能的セルフ・エピグノーシスとして、潜在意識的セルフ・エピグノーシスとして、意識的セルフ・エピグノーシスとして、そして超意識的セルフ・エピグノーシスとして区別することができます。

**創造界の様々な表現レベルでセルフ・エピグノーシスがあり、その結果、**

**絶対セルフ・エピグノーシス、**

**魂のセルフ・エピグノーシス、**

**永遠のパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシス、**

**そして現在のパーソナリティーのセルフ・エピグノーシスがあるにもかかわらず、**

**実際にはただ一つのセルフ・エピグノーシスがあるだけです。**

転生し、Lifeの現象の中でなじみ、経験をし、個別の実体として現れる可能性を人間に与えるのは、セルフ・エピグノーシスのロゴス的属性です。

Lifeの現象として、現在のパーソナリティーの様々な現れの段階を通過する人間は、多くを得ることができます。人間はセルフ・エピグノーシスの多くのレベルを通過しなければならないでしょう；それは本能的、および潜在意識的セルフ・エピグノーシスから超意識的セルフ・エピグノーシスまであります。これら様々なレベルのセルフ・エピグノーシスはまた、現在のパーソナリティーによって表現される意識レベルに大いに関係しています。

\*Page3

私達は意識をどのように理解することができるでしょうか？意識は不変である中心点と考えることができ、この“不変”の状態において、それは魂のセルフ・エピグノーシスの現れとみなすことができます。この“不変の”意識は、セルフ・エピグノーシスのレベルに応じてその現れが制限されます。

要するに、セルフ・エピグノーシスの様々なレベルは、

現在のパーソナリティーが無知の中に取り込まれた結果としてできたのです。

今や私達は、セルフ・エピグノーシスと意識は大いに相互関係がある、と結論づけることができます。

私達の意識は不変であっても、それもまた無知の中に取り込まれ、その結果、セルフ・エピグノーシスの他のレベルが生じます。ですから、“意識”と“セルフ・エピグノーシス”は互いに関係があるのみならず、現在のパーソナリティーの成長過程における進歩の決定において、互いに依存しています。

セルフ・エピグノーシスという言葉の使用を避けるために、いろいろな人々やグループでは、セルフ・エピグノーシスの代用として気づき(awareness)という言葉を使用しています。しかし、そのような解釈は誤解を招く恐れがあります。なぜなら、気づきという言葉は、現在のパーソナリティーによって意識として表現されたレベルを示しているからです。それは、現在のパーソナリティーによって現された “気づき”のレベル以外の何物でもない思考・行動のレベルです。

気づきとは、時間・空間の意味内での、私達の意識であるセルフ・エピグノーシス(consciousness self-epignosis)の活動の結果として創造された何かです。そのため、気づきは、私達が様々な次元の幻想を抱く実存の諸世界に属するものです。

意識はLifeのスパークです。私達はロゴス的意識であって、セルフ・エピグノーシスとして表現される意識を有し、また聖霊的(Holyspiritual）なアークエンジェル的意識を有しています。**実存の諸世界より上の世界では、全ての人間の意識は同じで、しかも個別性を保持しています。なぜなら、人間はまだセルフ・エピグノーシスと呼ばれるこの能力を保持しているからです。**

私達は気づきのフィルターを通して何かに気づきます。しかし、人間にはセルフ・エピグノーシスがあると言う場合、それは現在のパーソナリティーのフィルターを通過した気づきの結果を意味しません。エピグノーシスは、たとえ現在のパーソナリティーでも（そしてある程度それは現在のパーソナリティーのフィルターを通過するにもかかわらず）、何が良いか間違っているかを内側から感じる能力として、人間のイデアに与えられた能力です。

人間には何が正しく何が悪いかというエピグノーシスがありますが、そのパーソナリティーがそのエピグノーシスを実際に現すことを、気づきのレベルが許さないのです。

そのためパーソナリティーはしばしばジレンマに陥り、その結果いわゆる“罪悪感”に苦しんだり、あるいはエピグノーシスからの指令を無視したという責苦にフタをするために、行為を正当化しようとします。

私達は何が正しいか間違っているかを知っているのではなく、私達には何が正しいか、何が間違っているかのエピグノーシスがあるのです。しかし、私達の思考・行動のレベルがそれを許さないのでそれに従って実行しませんが、それは私達の現れの真のレベルではありません。これが“エピグノーシス”と“気づき”の違いです。

私達の兄弟であるアークエンジェル達は、何らかのセルフ・エピグノーシスと呼ばれるものを有しているのですが、自分達が属しているオーダー（グループ）の中で自分自身を区別することができません。言い換えれば、彼らは個別性というものを全く表現できず、全てのミカエルはミカエルであり、ミカエルの間に互いに違いがあるという概念が全くないのです。　もしあなたがミカエルに名前を尋ねると、彼は「私はミカエルです」と答えるでしょう。彼らは他の異なったアークエンジェルのオーダーと自分達のオーダーを区別することはできますが、セルフ・エピグノーシスとして“I'ness”を表現することはありません。質としての“能力”は彼らのロゴス的現れにおいても、聖霊的現れにおいても内在していますが、アークエンジェル達は“個別の”セルフ・エピグノーシスではなくて、自分達が属するオーダーのグループとしてのセルフ・エピグノーシスを表現することを選択したのです。

ロゴス的存在である人間にも聖霊的な側面があります。アークエンジェル達の中にもロゴス的質がありますが、人間はよりロゴス的です。アークエンジェルには自分達が属するオーダーを他のオーダーと区別し、創造界において自分達が達成すべき特定の仕事を他と区別するためだけに必要なロゴス的質があります。

\*Page4

機敏であること(alertness)、気づき、セルフ・エピグノーシスはどのように互いに関係しているのでしょうか？真理の探究者は常に機敏で注意力を保つようにすべきです。それは油断なく警戒し、見張っている状態以外の何物でもありません。静穏、静けさを保つために機敏さを鈍らせることは避けるべきです。

真理の探究者は超機敏な状態を得るようにすべきです。機敏さとセルフ・エピグノーシスの違いは何でしょうか？

先に私達は、エピグノーシスは知ること、意識的セルフ・エピグノーシスの様々なレベルを実際に知ること、さらにたとえそれが思考・行動の仕方として表現されなくても、内側から来るものを知ることである、と述べました。

機敏さがある場合、あなたの気づき、あるいは意識のレベル以外から、思考・行動の仕方としてあなたの現在のパーソナリティーを表現することはできません。（＊訳注…十分な機敏さがあれば、その時の自分の気づき、意識のレベルで考え、行動して自分自身を表現できるという意味）

機敏さはセルフ・エピグノーシスのいかなるレベルにおいても働きます。意識的セルフ・エピグノーシスおよび気づきとしてあなたがどのレベルにいようとも、そこで機敏性を働かせます。

私達は常に主なる神、絶対、神の聖性に抱かれています。

EREVNA/MAC6/DOC/EN/904/2/